

## 「無防備」の力

### ルカによる福音書 20 : 45 - 47

20:45 民衆が皆聞いているとき、イエスは弟子たちに言われた。20:46「律法学者に気をつけなさい。彼らは長い衣をまとって歩き回りたがり、また、広場で挨拶されること、会堂では上席、宴会では上座に座ることを好む。20:47 そして、やもめの家を食い物にし、見せかけの長い祈りをする。このような者たちは、人一倍厳しい裁きを受けることになる。」

先週、仙台川平教会で牧師就任式があり出席しました。式が終わり記念写真を撮ることになり、講壇の前に並んで集合写真を撮ることになりました。すると誰かが、牧師先生は前に座ってくださいと言うのです。私は、「こういうところにも序列があるのか」と思い、少々複雑な気持ちがありました。

昔、東一番町教会の田中牧師が言いました。「謙遜な人ほど礼拝堂では前列に座るものです」と。当時は前列の方ががら空きで、後ろに詰まって座っていましたから、思うに柔らかな田中老牧師、ささやかなアンチテーゼを出したのかもしれませんが。

甲府で牧師をしていた時、山梨分区の全教会の集まりが甲府教会でありまして、盛大な会を催しました。礼拝後、茶話会の時に各教会の紹介があり、それぞれスピーチをしたのですが、その時、恐らく心に病のある女性だろうと思います、その方が話しました。彼女はある牧師の批判を始めたのです。そして他の牧師たちに対しても、「偉そうにしている」と不満をぶちまけました。ちょっと場が緊張しましたが、私はあながちクレージーな発言でもないように思いました。同じようなことは私も感じないわけではなく、自戒しなければと思ったものです。

イエス様はどうだったのでしょうか。そんなこと、思っても言わないのが普通。私なら、その人の問題だと考えます。でもイエス様は公言されました。イエスのことを悪霊がとりついた狂人だと揶揄する声があったわけですが、上品な人だったら多分同じ意見を持つのではないのでしょうか。

ここでちょっと視点を変えてみてみましょう。律法学者の立場だったらどうでしょうか。彼らが、長い衣を身にまとい、広場で懇篤なあいさつを受け、上座、上席に座り、招待された家で食事のもてなしを受け、人が感心するような立派な祈りをする。つまり、威厳を示すのはなぜでしょうか？単に偉そうに威張ることで、いい気持になりたいからでしょうか？まあちょっと精神的に未熟な人ならば、そういう快感を好むのかもしれませんが、現実的にはそういうことはあまりないのではないのでしょうか。

権威を演出する。これはちゃんと話を聞いてもらいたいと思えば、誰でもが工夫するこ

との一つではないでしょうか。それ相応の場にふさわしい恰好をし、儀式ばった所作や紹介を受けることなど、皆が耳を傾けたいくなるような演出は必要だと思うのです。信頼してもらわなければ始まらないのですから、「信頼に足る頼りがいのある人ですよ、私は」という自己アピールの努力、律法学者たるにふさわしい立ち居振る舞いと申しましょうか。そうしなければ、頼りないと思われて誰も聞いてくれなくなる、と思うのではないのでしょうか。事実イエスは急速に民衆の支持を失っていきます。威厳を保つということは、そういうこととして伝統的に磨きのかかった演出効果なのであって、そこに誘惑があるのは確かですが、だからと言ってただ優越感に浸っていい気持ちになるためではないでしょう。そういうことが大事だとは、誰もが暗黙の了解をしていることではないのでしょうか。分かっていないのはイエスの方だ、ということにならないでしょうか。

こうしてイエス様を、ナイーブなラディカリストだと決めつけることだってできたし、実際当時の人々はそうしたのだと思います。けれどもイエス様は、当時の人々が決めつけたような粋がった青二才ではなかったということが聖書の前後の文脈をよく読むとわかります。

前のところでは、メシアに語り掛ける神の言葉が書かれています。私の右に座していなさい。わたしが敵をあなたの足元にひれ伏させるまで(20:42c-43)。「静まりて、我の神たるを知れ」(詩編 46:11)ということです。つまり、イエス様は神様の業に何物も付け加えることをしない。完全にゆだねるのです。そしてこの後、イエス様は弱さの極みの中で十字架につけられ息絶えます。そして、復活。それは以前にお話ししたように、文法的には「受動態」で表現され、一部の隙もなく、完全に神の、神のみの業であることが強調されています。パウロの言葉を借りれば、「キリストは、弱さのゆえに十字架につけられましたが、神の力によって生きておられるのです」(Ⅱコリント13:4)ということです。神に仕えることはこういうことだと身をもって示されるイエス様。そのイエス様にとって、律法学者の演出は、それがどんなに神に協力しようとする善意のものであったとしても、神の前にしゃしゃり出る余計な代物でしかなかったのです。

かつてモーセも同じような失敗をしています。神はファラオに「我が民を去らせよ」と告げるように命じました。モーセは、それだけでは説得力に欠けると配慮して余計な言葉を付け加えました。「神の祟りで疫病もしくは戦争で滅ぼされないように」と加えました。もとより神は、ファラオは何を言っても拒否することになっていると伝えていたのに、モーセは自分の言葉に説得力を持たせる演出をしたのです。けれどもその演出が裏目に出て、イスラエルは重い苦役を負わされる羽目になりました。これに懲りたモーセは、今度は忠実に神の言葉を伝えるようになったのです。

神様は人間のいかなる協力も寄せ付けないのです。牧師の仕事も神に協力することではありません。川平教会で私は次のようにスピーチしました。「牧師の仕事は、自らの弱さを通して神の栄光を表すことです。ですから牧師は、神と会衆との前に、無防備で自らの弱さを差し出すのです。」私は若い頃、牧師になることを考えた時に、こういうことだったなら自分にもできるかもしれないと思ったのです。おそらくどの牧師も、自分には才

能があるから牧師になると思った人は一人もいないでしょう。弱さを差し出す。それなら  
できるかもしれないと思ったに違いないのです。

パウロは、肉体の棘に苦しみました。そのために伝道旅行の計画を変更して休養のため  
にガラテヤ地方に立ち寄ったのです。彼の姿は見るも哀れなものだったと言います。そ  
れでもそこに、ガラテヤ教会が生まれました(ガラテヤ 4:12 以下)。こうした体験を背景  
にしてパウロは言います。

わたしの身に一つのとげが与えられました。それは、思い上がらないように、わたしを痛  
めつけるために、サタンから送られた使いです。 12:08 この使いについて、離れ去らせて  
くださるように、わたしは三度主に願いました。 12:09 すると主は、「わたしの恵みはあな  
たに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、  
キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。  
12:10 それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、  
キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。(Ⅱコ  
リント 12:7b以下)

無防備で弱さを差し出す。これが私たちのすべきことです。説得力の演出は不要です。  
聖地旅行で現代のベツレヘムを訪れた人が言いました。イスラエル人とパレスチナ人の  
境に分厚い塀が張り巡らされていますが、その人の報告では、それは全体の 8 パーセン  
トでしかない。あとは無防備だということです。なぜか。そこには軍事施設がないからです。  
無防備である事こそ、人と人とを結びつける力です。無防備であれば傷つくこともあるで  
しょう。でも私たちには癒してくださる方がいるではありませんか。たとえ癒されなくても、人と  
つながる業はやりがいのある使命ではないでしょうか。今週も無防備の旅に出かけましょ  
う。